

防犯カメラが見ている

小川 莓

土曜日の夕方のことである。真知子が夕飯の配膳をしていると、玄関のドアが怒声まがいの音を立ててバツターンと閉まり、町内会の会合から帰ってきた弘司がテーブルの上に肩掛けカバンを乱暴に投げ出した。カバンの口には今日の説明会の資料だろうか、無造作に折ってねじ込んだ印刷物が見えている。気に入らないことがあるとすぐモノに当たる弘司の性質は十二分に承知しているが、最近は何となく一方である。人間年を重ねると角が取れて丸くなるなんて嘘だ。年々意固地になって傍迷惑この上ない。こういうときはあえて何も言わず、平静を装うに限る。

「まったく、やってらんないよ」

案の定、不平不満の凝縮したような第一声が漏れた。「なんで？」と訊くと、

「反対するやつがいたんだよ。プライバシーがなんだかんだ言いやがって」

弘司は吐き捨てるように言うのと、放り投げたカバンから例の印刷物を取り出して見せた。『防犯カメラ設置についての説明会』と書かれたそれらの資料には、所々ボールペンで書き込みがしてあった。乗り気で出掛けたのに、おそらく予想外の展開だったのだろう。正義感に水を差された気持ちを理解できなくはない。

事の発端は、近所のゴミ置き場における不法投棄が度重なり、住民から苦情が寄せられたことにあった。週に三日、可燃ごみ、不燃ごみ、資源ごみの収集曜日・時間が決まっているにもかかわらず、夜半か早朝にこっそり投棄する者がいる。朝になってみると散乱した生ゴミをカラスが漁っていたり缶やペットボトルが転がっていたりして、近隣の住民が後始末せざるを得ない。無分別のまま大量に置かれた袋を仕分け直す作業を、真知子も何度か手伝ったことがある。いったい誰がこんな非常識なことを？ 最近増えてきたシェアハウスに住んでいる学生たちの仕業に違いないとか、自転車でゴミ袋を持ってきて素早く投げ捨てて行くのを見たとか、犯人探しに躍起になってみたものの、確たる証拠がないことには警察に通報することもできない。かといって徹夜で番をするわけにもいかず、こうなったら町内会で話し合って防犯カメラを設置することにしようという案が出された。

空き巣やオレオレ詐欺も横行する昨今、犯罪抑止力に繋がる防犯カメラの導入は満場一致で可決されるものと思いきや、会合に参加した住民の中に異を唱える輩がいたために今回は保留になったというのだ。よもや反対者がいるなど考えもしなかった推進派は、託ち顔で会場を後にしたらしい。

「誰が反対したの？」

「ほら、銀行の頭取の邸が更地になったあとに新しくできたテラスハウス、あそこに越してきた若い夫婦が何組かいて、カメラはどこにつけるんだとか、細かいこと言い出して」

「ああ、駐車場に高級車ばかり停まってる、お洒落な感じのお宅ね」

「実際、金持ちか何か知らないけど、家の中が見えるようだと言っているとプライバシーに関わるから、むやみにカメラを設置して欲しくないと言いついてさ」

「若い人が賛成しないんじや、仕方ないじゃない」

「それにしても言い方が気に入らない。なんでも自分の会社はIT関連で、この業界ではオンとオフのルールをきちんと決めていて、休憩室とかプライバシー空間には監視カメラ

はつけていない。四六時中誰かに見られているという状況はストレスになりかねない。ストレスは仕事の効率にも影響する。ましてや日常生活の中にそういったストレスを持ち込むというのはいかなるものか。場合によってはプライバシーの侵害に当たる：とか、偉そうに言うんだから」

三十年以上建設会社で真面目に働いたのに大した出世もせず、薄給のまま定年を迎えようとしている弘司にしてみれば、ヤングエグゼクティブの舌鋒にしてやられた感もあり、憤懣やるかたなしといったところだろう。

「プライバシーもくそもあるかっ！　もしかすると反対するやつが犯人なんじゃないか。まったく、最近の若いやつはどうかしてる」

やれやれ。最近の若い者は：ときたら、自分が年とった証拠である。いずれにせよ価値観が多様な世の中、ちっぽけな町内会ですら一筋縄ではないということだ。防犯カメラの設置については保留になったものの、交番の地域パトロールを強化してもらうことで同意が得られ、散会に至ったとのことだった。

つい先日ゴミ置き場の向かいの家の老夫婦が腰をかがめてゴミを片付けていたことを思い出し、真知子もじわじわ憤りを覚えた。結局、至近距離の住民ばかりが清掃する羽目になり、被害が及ばないところの住民は素知らぬ顔で過ごしている。このまま自己中心で他人に無関心な人間が増えていったら、世の中は荒んでいく一方ではないか。

ここは気概に一票。冷蔵庫から冷えた缶ビールを取り出し、快く弘司に差し出した。

——本日午前十時、逃走していた〇×容疑者は、現場から十二キロ離れた場所で身柄を拘束され、警察署で詳しい取調べを受ける予定です。

お昼のTVニュース。人相の悪い中年男が警察官に連行されていく。アナウンサーの話によると、強盗をはたらいたコンビニエンスストアの防犯カメラ映像や、沿道に設置されていた監視カメラの画像が迅速な犯人逮捕に繋がったとか。最近のカメラは精度が上がっているから人物の特定にも時間が掛からないのだろう。店内に設置された複数のカメラに捉えられた容疑者と思しき映像が公開されていたが、なるほど、落ち着きなく辺りを見回すその姿は、特徴を見て取れるくらい鮮明である。

特定の宗教を持たない人が多い我が国では、昔から「お天道様」や「世間様」が神様になり代わって犯罪を抑制してきたというが、良心や体裁が効力を失ってしまった最近では、専ら防犯カメラがその役割を果たしているようだ。それにしても、犯罪者の人相というのは例外なく醜い。よく童話などで悪魔が乗り移った登場人物の顔が変貌してしまう場面があるが、ニュースで報道される犯人の顔はどれをとっても悪の権化に見える。

いつまでもTVに見入っているわけにもいかない。真知子はソファからさくつと腰を上げた。主婦は「三食昼寝付き」などと言われるのは癩に障るから、それなりに家事に精を出すことにしている。掃除機掛けは毎日欠かさず、洗濯物は朝一で干して午後一前には取り込む。食費を節約するためにスーパーをはしごして特売品を買い揃えるのも主婦の腕の見せ所だ。時々余裕のない自分に気づいて溜息をつくこともあるが、義務感に駆られて自転車を走らせる日々である。

駅前のスーパーに着くと、店先にセールの幟が立っていて駐輪場も混雑している。店内も同様、青果コーナーには人だかりができていて、日替わりの限定品をゲットするのも一

苦労だ。不景気を反映してか、買い物客は特売日にばかり集中し、昼間からレジは大渋滞、買った品物を袋に入れるレジ横のテーブルもごった返している。しばらくカゴを持ったままスペースが空くの待っていると、ようやく端のほう为空いたので滑り込んだ。買ったものを手早く買い物袋に詰め込んでから、ふと見ると、先客の仕業だろうか、レジカゴがテーブルの上にそのまま放置されている。ただでさえ混んでいてスペースの確保が大変なのに使用済みのカゴを片付けなくて置いていくなんて、非常識ったらありやしない。腹立ち紛れにカゴをむんずと掴み、自分のカゴと重ねて片付けようとしたところ、

「？」

何か入っている。生ハムだ。真知子は一瞬躊躇したが、次の瞬間それを自分の買い物袋に入れた。ラッキー、今晚サラダにして食べてしまおう。いいじゃないか、うっかり忘れていくほうが悪いのだ。そもそも、カゴを放置していくという行為がいけない。自分が代わりにカゴを片付けてあげたのだから、これはきつと善行の報酬に違いない。そんな理論を頭の中で勝手に組み立て、そそくさとその場を後にした。

駐輪場から自転車を引き出し、帰り道を急ぐ。混んでいる大通りを抜けて、いつものように住宅街の脇道に入る。自宅まではほんの十分足らずだが、いつになく距離が長いような気がする。しばらく自転車をこいでいるうちに先刻の幸福感は薄れ、逆に罪悪感のバロメーターが上昇し始めた。一メートル進むたびに一目盛り、また一目盛り。そして自宅に帰り着いたときにはマックスの状態になっていた。忘れ物とはいえ、他人の買ったものを盗ったら泥棒である。気付いた時点で店の人に「忘れ物です」と知らせるべきだったのだ。それをこともあろうに、自分は持ち帰ってしまった。いい歳をして善悪の判断もできないなんて情けない。でも、いったん持ち帰ったものを返しに行くのも、変に思われそうだし…。隣には誰もいなかったから、言わなければわからないんじや…

とその時、ある重大なことに思い当たった。確かスーパーの店内には、防犯カメラが設置されていた。前にレジ待ちをしていて何気なく見上げたとき、店内が映っているモニターがあったことを思い出した。各階に複数のカメラが設置してあるらしく、売り場の映像がランダムに切り替わっていた。買い物客の様子も結構はつきり映っていて、レジ周辺は頻繁に映し出されていた。まずい…これは、とんでもないことになった。もしかしたら、防犯カメラに映ってしまったかもしれない…！

俄かに全身の血が逆流し、へなへなと力が抜けた。忘れ物に気付いた客がスーパーに問い合わせ、時間と場所を特定した上で映像をチェックされるようなことになったら、もうおしまいだ。レジ横のテーブルで、放置されているカゴに気付いて手を掛ける黒いニット帽の女。生ハムらしき商品を手にした次の瞬間…！間違いない、この女が犯人だ。人目を気にするように周囲を一瞥した女の顔を、レンズは見逃さなかった。まるで悪魔に魅入られたかのような、その顔を。

ぎゃっ！真知子は思わず顔を覆ってその場にへたり込んでしまった。悪の分身と化した自分が、モニターの中からケケッとせせら笑ったような気がしたのだ。魔が差すとは、まさにこういうことをいうのだろう。とにかくとんでもないことをしてかしてしまった。このままではいけない、一体どうしたらいいのだろう…。

意気消沈したまま買い物袋を抱え、とりあえず玄関のドアを開けて家の中に入った。今しがた買ったものを冷蔵庫や乾物棚に移したが、問題の生ハムだけはどうしても冷蔵

庫へ入れる気になれない。リビングのテーブルの上に置いて恨めしく眺め、悪あがきとは思いつつレシートを取り出してみる。自分で買ったのではないのだから、当然生ハムの記載はない。たかだか三百円ちよつとの品物のことで、こんなに苦しめられるくらいなら持つて帰って来るんじゃないかった。しかも決定的証拠をカメラに収められたときている。

どうしよう、本当にどうしよう。頭の中に靄がかかったようで、何も手につかない。真知子が途方にくれて生ハムと対峙しているところに、娘の由佳がやってきた。

「うーん、よく寝た」

今年二十二歳になる由佳は今日は仕事休みらしく、自室から出てくるなり「お腹すいたー、何かある？」と、至って無邪気な様子である。

「あつ：ああ、今起きたの？」

平常心を装ってキッチンへ行こうとすると、由佳はテーブルの上にあった呪いの生ハムをこともなげに摘み上げた。

「これ、食べていい？」

「そつ、それはっ：」

真知子は慌てて娘から生ハムを取り上げた。

「なによ、食べちゃだめなの」

「じ、実はね、これ、買った覚えがないの」

「どうということ？」

「さっきスーパーに行ったら特売日ですごく混んで：。レジで清算終わって、カゴから買い物袋に入れ替えるときに、隣の人の買ったものを間違って入れちゃったみたいなの：。レシートで確認したら、やっぱり買ってなくて。それで、どうしようかと思って：」

「はア？」

「なにしろ混んでたから：そのときのこと、よく覚えてなくて：どうしよう」

真実を自白するのも決まりが悪いので、言葉を濁すしかない。母親の罪状を知ってか知らずか、由佳は呆れたように言い放った。

「だからって、このままクヨクヨしてるわけ？」

「でも：もううってわけにもいかないし：」

「だったら返しに行けばいいでしょ。よくいるんだよね、自分が何を買ったか覚えてなくて、あれが入ってなかったとか、これが入ってなかったとか、後で言いに来る人」

和菓子の小売店に勤める娘は仕事柄そういった対応に慣れているらしく、レシートと商品を持っていった説明すれば問題ないと言う。

「買ったのはどのくらい前？ 返しに行くんなら早いほうがいいよ。ほら、一緒に行つてあげるから」

由佳の先導で、つい三十分ほど前に通った道を反対方向へ走る。てきぱきと行動に移し、自転車をこいでいく後姿が心強いやら、申し訳ないやら。由佳が中学生の頃、学校でちょっとした校則違反をやらかして親が呼び出されたことがあったが、今回は完全に立場が逆転している。

スーパーに着くと、お昼時のピークを過ぎたせいか、レジもそれほど混んでいなかった。近くにいる店員に事情を説明して商品を戻せば事足りると簡単に考えていたら、ここでも娘が主導権を握り、

「こういうときはパートやアルバイトじゃなくて、ちゃんとした人を呼んでもらって話したほうがいいよ」

はからずもクリア条件の難易度が上がってしまった。

保身を最優先に考えた末、子供に付き添われてスーパーの責任者の前に突き出される羽目になるとは本当にみつともない話だ。後悔頻り、鬱々とした気分でしばらく待っている、職員通用口から生肉売り場の作業着を着た男性が現れた。

「お話、伺います」

「お忙しいところすみません、四十分くらい前にこちらで買い物をしたんですが、手違いで購入していないものを持ち帰ってしまったみたいで」

由佳は生ハムとレシートを差し出して記載がないことを証明し、
「混んでいたのも、もしかしたら袋に入れて持ち帰るときに、隣の方が買ったものを間違えて入れてしまったのかもしれませんが」

と付け加えた。滑らかな口調で事の次第を説明された責任者の男性は、

「お客様が買いになったものは、全部あったんですよね？」

と事務的に確認して生ハムを受け取り、忙しげに奥へ消えていった。先方はクレームを警戒していたのか、こちらが問い詰められるようなことにはならなかった。

とにかく忌まわしき生ハムを無事に戻すことができた。もし忘れていった客が申し出たとしても、該当する商品が戻っていれば防犯カメラの画像が暴かれることもないだろう。自分ばかりうじて犯罪者にならずに済んだのだ。

「お昼ご飯、まだだったね。何か食べて帰る？」

危機から救ってくれた由佳には感謝しなくてはならない。事なきを得たとはいえ、些細なことから身を滅ぼす恐ろしさを重々思い知った。

しばらくして、ゴミ置き場の防犯カメラについての続報が入った。弘司の話によれば、最初の説明会では難色を示していた一部の人たちが、小学生に声を掛けて連れ去ろうとした不審者の身元が防犯カメラのおかげで割り出されたという他の自治体の例を挙げたところ、急に前向きな態度に変わったとのことだった。異を唱える輩がいなくなり、今回は上機嫌で帰宅したのかと思えば、そういうわけでもないらしい。

「隣のS区やO区では結構前から導入されていて、不審者対策のほか、交通事故とか、通学路の安全管理の面でも効果があるっていう話をしたら、急に態度が変わったんだ」

「ふうん、よかったじゃない」

「子供が今は幼稚園に通ってるけど再来年には小学校に入学するから、そのときまでに設置していただけるとありがたい、なんて手のひら返したように言うんだぜ。結局、自分たちにとってプラスになるかどうかが判断の基準なんだろう。ゴミ置き場が散らかって他人が困っているような、自分たちに直接関係なければ賛成しなかったと思うよ。そのくせ、自分の子供が誘拐されたり事故にあったりしたら一大事、だからな」

防犯カメラが設置されることで不審者や暴走車を抑制できるのなら、大いに結構。全会一致で可決され、次回は具体的な設置場所について検討する運びになったらしい。

「いいじゃない、設置することに決まったんだから」

「そうなんだけど、初めはプライバシーがどうのこうの言ってたくせに、見え透いてるん

だよ。ああいうタイプの人間は、ずる賢い感じがしてどうも好きになれない。大体あの若さであんな高級住宅に住めるなんて、陰で何か悪いことでもしてるんじゃないのか」

「やっかみ全開、これも毎度のこと、腹にあった一物を今さら吐き出すように愚痴る。『こうなったら、そこいら中にカメラを取り付けたいんだ！ 正々堂々と生きていれば、一部始終撮られたって何の問題もないじゃないか』」

真知子はぎくりとした。正義漢の夫には、先日のスーパーでの出来事は話していない。もしスーパーに防犯カメラがなかったとしたら：他人のものを掠め取って、バレなければそのまま過ごしていたかもしれない。自分の心の奥底にはたぶん悪魔が棲んでいるのだ。

悪魔は誰も見ていなければ顔を出すけれど、見られていることで封印される。それは保身であり、良心とは言い難い。だからこそ、お天道様ならぬ防犯カメラが目光らせているということか。

駅前のスーパーに着くと、真知子はいつものように買い物拭袋を脇に抱えて店内に入った。生ハムの一件が落着しなかったら足が遠のいていたに違いない。普段からよく利用する店なので、後ろめたいことを払拭できてよかった。しかしあれ以来、防犯カメラの存在が気にかかるようになり、買い物中もどこから映されているのだろうと神経質に天井を見上げる癖がついた。なんとも、怪しげな客に成り下がってしまったものだ。

地下の食料品売り場は今日も混んでいる。お昼時、レジ渋滞もテーブルコーナーの混雑も相変わらずである。先客がいなくなるのを待って、空いたスペースを確保する。

持って来た買い物袋に買ったものをあらかた詰め込み、その場を離れようとしたとき、

「あとう」

隣にいた客が話しかけてきた。見ると、人の良さそうな白髪の男性である。

「？」

「これ：お宅のじゃありませんか？」

指差す先に、ぽつんと食パンが置かれている。真知子は手短に「違います」と言っって買い物袋を肩に掛け、脇目も振らず上りエスカレーターに飛び乗った。

外へ一歩出ると照りつける初夏の陽射しが眩しい。額の上に手をかざしながら持ち重りのする買い物袋を自転車の後ろに積み込む。さっきの食パン、どうなったのだろう。

果たして、あの好々爺の顔がモニターの中でケケツと笑ったかどうか、それはお天道様に訊くまでもない。

(終わり)